関東都市学会ニュース
2026 年 11 月号

(2026-3 号)
発行　関東都市学会
〒370-0801　群馬県高崎市上並榎町 1300
高崎経済大学 地域政策学部 米本清研究室内

http://www.kanto-toshigakkai.com

2026 年度の関東都市学会秋季大会を、12 月 5 日（土）に神奈川県鎌倉市にて開催いたします。会員の皆様には、**11 月 27 日（金）までにご参加申込をいただき**、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

非会員の方のご参加も受け付けております。参加申し込みの際は、参加者ご本人から、下記より参加申し込みをお願いいたします。もしくは、紹介者となる会員から事務局へ、非会員の方の氏名、ご所属、ご連絡先をメールにてお知らせください。

なお、理事会・各委員会は秋季大会時には開催せず、2027 年 1 月 11 日（月・祝）にオンラインにて開催いたします。理事・委員の皆様には、別途メールで詳細をご連絡いたします。

↓秋季大会へのご参加申込はこちらからお願いいたします↓

左の QR コードまたは https://forms.gle/UMco2xoznr4sCZoh8 にアクセスしてください。QR コードでのお申込ができない場合は、事務局（info@kanto-toshigakkai.com）へメールにてお知らせください。

関東都市学会 2026 年度秋季大会のご案内

大会テーマ「重層的歴史都市「鎌倉」の相克と展望」

開催日時：2026 年 12 月 5 日（土）10：30～16：30
開催場所：神奈川県鎌倉市
主催　　：関東都市学会
後援　　：鎌倉市
大会会場：鎌倉婦人子供会館　ホール　（鎌倉市小町 1-11-5　TEL：0467-22-0507）
※今回は対面のみの開催となります。
※なるべくシンポジウムからの参加をお願いいたします。
※会場へのアクセスは P. 3 の地図参照。

10:15～　受付開始
10:30～　シンポジウム開始・会長挨拶
鎌倉市長挨拶
高橋慎一朗氏（東京大学史料編纂所）報告
奥山信治氏（鎌倉市都市景観課）報告
石神裕之氏（京都芸術大学）報告
パネル・ディスカッション
12:45～　休憩
13:50～　エクスカーション受付開始（集合場所は鎌倉婦人子供会館前。P. 3 の地図参照）
14:00～　鎌倉市内でのエクスカーション
角田朋彦氏（京都芸術大学）・古田土俊一氏（鶴見大学）のご案内で、鎌倉市における遺跡保存などの取り組みや、法華堂跡と鶴岡八幡宮、廿五坊跡の 3 か所を巡りつつそれぞれの先生から解説などを行っていただき見学します。
なお、道が狭いため、人数によっては 2 グループに分けて巡見を実施します。
16:30 頃 解散、鎌倉駅周辺にて懇親会ないし茶話会

秋季大会　解題

大会テーマ「重層的歴史都市「鎌倉」の相克と展望」

野村　朋弘（京都芸術大学）

中世武家政権の誕生とともに形成された都市・鎌倉は、三方を山に囲まれ南を海に臨む特異な自然地形と、そこに築かれた都市空間が一体となった稀有な歴史的景観を今に伝えている。谷戸の奥深くに配置された寺社や切通し、若宮大路を基軸とする都市構造は、中世の政治・信仰・防衛の論理を色濃く反映したものである。しかし近代以降の鎌倉が辿った道程は純粋な中世空間の保存ではなく、近代国家のイデオロギーや新たな都市機能との複雑な接合の過程であった。明治期における皇室・要人の別荘地化、さらには東京近郊の風光明媚な住宅地・観光地としての再編は、鎌倉に多層的な意味空間を付与した。同時に、高度経済成長期の宅地造成の波は丘陵地の歴史的風土を侵食し、これに抗する形で湧き起こった御谷騒動をはじめとする市民運動は、1966 年の「古都保存法」制定へと結実した。このように鎌倉は前例のない景観保全運動と法制度の運用を軸に開発の圧力とせめぎ合いながら独自の都市像を模索してきた歴史を持つ。

その歩みにおいて一つの大きな到達点であり、同時に決定的な転換点となったのが、1990 年代初頭の暫定リスト記載に始まり、2013 年に至るユネスコ世界文化遺産登録推進事業の帰結であった。約 20 年に及ぶ官学民を挙げた運動の末に突きつけられたイコモスによる不記載勧告、そしてそれに伴う推薦取り下げは、鎌倉という都市のあり方に根本的な再考を迫る出来事となった。

この取り下げを契機として鎌倉の歴史文化行政および都市政策は、世界遺産という国際的権威の獲得を目指す枠組みから脱却し、足元の地域社会に根ざした保全と活用の段階へと転換した。しかし現実の都市空間における課題が解消されたわけではない。むしろ、地面の下に広がる貴重な中世の埋蔵文化財をいかに後世に継承するかという技術的・制度的課題は現代の都市生活とより直接的に衝突している。市域全体が遺跡包蔵地と重なり合う鎌倉では、住宅の建て替えや生活インフラの更新に伴う発掘調査の負担、記録保存にとどまらざるを得ない開発現場の実情など、私権の制限と文化財保護の狭間で市民や事業者が抱える葛藤は日常的に生じている。さらに近年加速するオーバーツーリズムは交通混雑や生活環境の悪化を深刻化させ、歴史的風土がもたらす都市の魅力が、皮肉にも居住性の低下を招くという構造的な矛盾を露呈させている。かつての世界遺産登録推進が目指した理念と、現代の生活都市としての利便性や経済活動の要請との間で生じる摩擦、すなわち「生きている歴史都市」が背負うジレンマは依然として深刻である。

本大会ではこうした重層的な文脈を持つ鎌倉を舞台とし、世界遺産断念以降の軌跡と直面する諸課題について、多角的な視座から討議を深めていく。過去から連なる空間的・制度的な「相克」を所与のものとして受け止めた上で、歴史的遺産の継承と持続可能な市民生活・観光が両立する、これからの「生きている歴史都市」の新たな都市像と「展望」を描き出す場としたい。

秋季大会　会場へのアクセス

■シンポジウム会場

鎌倉婦人子供会館 ホール（鎌倉市小町 1-11-5　TEL: 0467-22-0507 ）

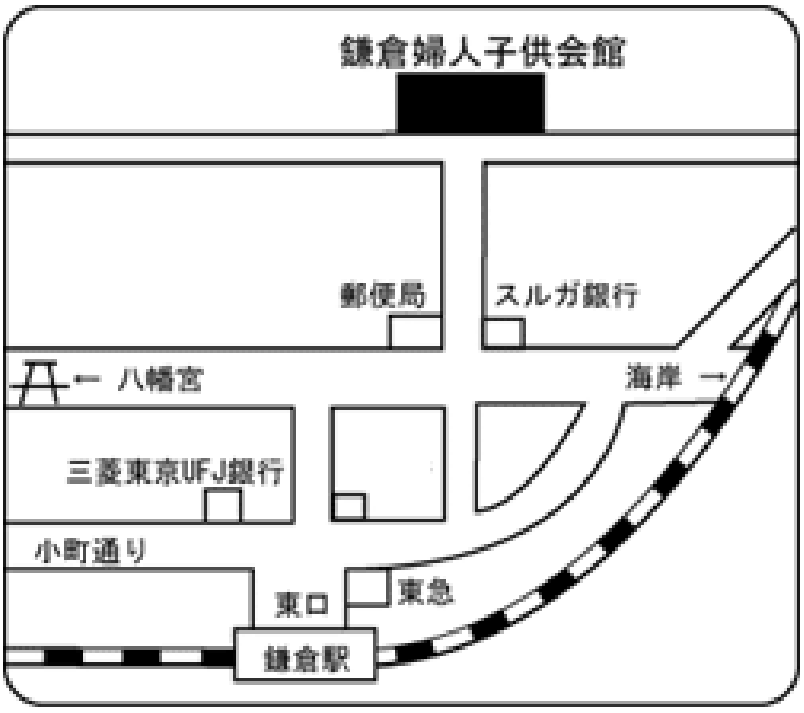
■エクスカーション集合場所

鎌倉婦人子供会館 前

■会場アクセス

鎌倉駅東口から徒歩５分。鎌倉郵便局の角を曲がってつきあたり。

■会場周辺地区



（鎌倉婦人子供会館 HP より転載 https://kfujin-kodomo.org/access/）

お知らせ・募集

【2027 年 3 月研究例会 報告者募集】

2027 年 3 月 6 日（土）に開催される 2026 年度第 2 回研究例会（関東近郊の大学にて 15:00 より開催予定。詳細はメーリングリストおよび学会 HP にてお知らせします。）の報告を募集いたします。報告をご希望の方は、氏名、報告タイトル､内容の概要（300 字前後）をメールにて、関東都市学会事務局までお寄せください。2027 年 1 月 8 日（金）を〆切とします。申し込みが〆切を過ぎる場合には事務局までお問合せください。

【2027 年度春季大会 自由報告募集】

2027 年 5 月 15 日（土）に早稲田大学西早稲田キャンパス（予定）にて開催される 2027 年度関東都市学会春季大会の自由報告を募集します。報告を希望される方は、氏名、報告タイトル､内容の概要（300 字前後）をメールにて、関東都市学会事務局までお寄せください。2027 年 2 月 26 日（金）を〆切とします。

【2027 年度 日本都市学会賞推薦候補図書の募集】

日本都市学会では、毎年大会時に日本都市学会賞（奥井記念賞）を選定しておりますが、その選定にあたり各地方都市学会から候補作品（最大 3 点まで）を推薦することになっています。関東都市学会として 2027 年度の日本都市学会賞候補作としてふさわしい推薦図書を選定するにあたり、会員から次の要領で推薦を公募し（自薦・他薦を問いません)、それを踏まえて選考作業を理事会内で行うことにいたします。

（１）候補作品の対象

2025 年 1 月 1 日～2026 年 12 月 31 日（奥付記載日）に刊行された、日本都市学会会員の著作（共著を含む）等

※ 日本都市学会賞（奥井記念賞）の推薦要件については､日本都市学会ホームページ http://www.toshigaku.org/を参照。

（２）推薦書類等提出物

推薦文（400 字程度）及び該当図書 2 冊（審査後必要であれば返却）

（審議のうえ審査対象になる場合、7 部（献本）が必要になります)。

（３）締切

2027 年 2 月 26 日（金）必着

（４）提出先

〒370-0801　群馬県高崎市上並榎町 1300

高崎経済大学 地域政策学部 米本清研究室内 関東都市学会事務局 宛

日本都市学会賞には特別賞（外国語著作賞、学術共同研究賞、まちづくり賞）の部門もあります。学術共同研究賞およびまちづくり賞については、2024 年 1 月 1 日から 2026 年 12 月 31 日の 3 年間に刊行された、日本都市学会会員の著作（共著を含む）等が対象です。こちらについても情報をお持ちの方は事務局までお寄せください（書式自由)。

【会員の異動】

なし

2026 年度第 2 回理事会（2026 年 9 月 5 日）報告

2026 年 9 月 5 日、2026 年度第 1 回研究例会に先立って 2026 年度第 2 回理事会が開催されました。報告・承認された主な内容は次のとおりです。

1. 本日の研究例会について
・ 松橋研究活動委員長より例会の流れと運営につき説明があり承認された。
2. 秋季大会について
・ 野村理事から日程・テーマ案・人選などの検討・調整状況について説明があった。
・ 登壇者の都合から 12/5（土）に開催する方向で調整することが承認された。当日は午前中にシンポジウムを商工会議所にて開催したあと、エクスカーションを開催する方向で検討中。
3. 来春以降の研究例会・大会について
（1）2026 年度 3 月研究例会
・ 1 月の委員会・理事会までに日程および会場を検討する予定であることが報告され、承認された。
（2）2027 年度春季大会
・ 会場は早稲田大学西早稲田キャンパスを第一候補として検討していることが報告され、承認された。
・ 具体的には、山本研究活動委員より「都市と大学」というテーマで企画していること、研究活動委員会内ワーキンググループにて検討を進めていくことが報告され、その方向で調整・検討を進めることが承認された。
4. 研究活動委員会から
・ 松橋研究活動委員長から研究活動委員会の検討状況のまとめ及び今後のスケジュールについて報告があった。
5. 編集委員会から
・ 畑山副委員長から年報 27 号の編集状況および年報 28 号の編集方針・予定について説明があった。
・ 年報 27 号は 9 月刊行の予定であることが報告された。
・ 年報 25 号、26 号の J-stage 上のデータの不具合とその対応についての説明があった。
6. 日本都市学会理事会から
・ 土居会長から、『日本都市学会年報』の電子化等に関する意見募集が行われていること、10 月 23 日～25 日に徳島大会が開催されることについて説明があった。
7. 事務局から
（1） 入会
・ なし
（2） 2027 年 1 月の理事会について
・ オンラインで開催することとし、日程は今後調整することとした。
（3） その他
・ 若手会員を増やす方法について意見が出された。

関東都市学会研究例会（2026.9.5）の記録

2026 年度関東都市学会第 1 回研究例会　印象記

畑山　直子（大正大学）

2026 年 9 月 5 日（土）、2026 年度第 1 回研究例会が対面（関東学院大学金沢八景キャンパス）とオンライン（ZOOM）のハイブリッド形式で開催された。当日の研究報告ならびに研究活動委員会ラウンドテーブル企画のご報告について、ごく簡単だが所感を述べたい。

前半の研究報告は、河承希会員（法政大学大学院）による「都市イメージ形成におけるデジタルサイネージ広告の役割に関する検討―ファンダム型広告事例を中心に―」であった。デジタルサイネージ広告とは、電子ディスプレイ型の情報伝達システムである。都市の繁華街を中心に政府や企業による広告として広く利用されている一方で、ある個別のファンたちが「推し」を応援するために自発的に行う非営利の広告が韓国から広がり、それらはファンダム型のデジタルサイネージ広告として、東京へと拡大しているという。このようなファンダム型デジタルサイネージ広告が、都市イメージの形成にどのように影響し、またいかなる役割を持つのかについて、ソウルと東京での定量的調査から明らかにしようとしたのが本報告の主旨である。

ご報告の中で特に私が関心を持ったのは、現代の広告というのは情報を伝達すること以上の機能を持っており、特にそれはファンダム参加型のデジタルサイネージ広告に顕著に現れているのではないか、というご指摘である。具体的には、デジタルサイネージ広告に参加することが、ファンダムの持つ力、例えば、消費金額（≒都市での購買力）を示すことにつながっており、そのことが都市イメージの形成に結びつく可能性が示唆されているのである。「推し」を応援するための広告の掲示が、ファンダムの存在を際立たせ、それが巡り巡って都市イメージを形作っていくというのは、大変興味深い現象である。今回のご報告では、ソウルと東京という二地点に焦点を当てていたが、韓国と日本における地方都市や、世界各国の都市においても似たような現象が見られるのかについて、今後のご研究の発展がとても楽しみである。

後半の研究活動委員会ラウンドテーブル企画「都市をめぐる研究・教育・実践のいま」第 7 回は、土居洋平会長（跡見学園女子大学）の司会のもと、熊田俊郎先生（駿河台大学名誉教授）によるご報告「北京 1989-90、『都市研究』との出会いそして中国都市」であった。熊田先生のご報告はまず、お生まれの町のことや藤田弘夫先生、高橋潤二郎先生との思い出・エピソードが、とても印象的だった。また、1989 年 8 月末から 1 年間、天安門事件の直後で戒厳令が布かれた北京で過ごした際の様子、中国における出稼ぎ労働者としての農民工の存在、中国の都市の住宅事情が中国型社会主義の特徴の一つである「単位」と密接に関わっているといったお話など、とても奥行きと広がりのある重厚なものであった。さらに、ご用意いただいた参考資料には、中国社会の理解を助けるためのさまざまな情報が掲載されており、そのような心遣いも先生のお人柄を表していると感じた。

熊田先生の中国への強いご関心が、一つ一つの研究に結実してきたという姿は、目先の仕事に一喜一憂することなく、着実に一歩ずつ進むことの大切さを改めて示していただいたと思う。何よりも、すべての研究者に向けて最後にお話いただいた「学者年代論」や「ジャーナリズムとは異なるモノグラフを書く」という議論は、「中堅」になりつつある今の私にとって、大きな示唆に富むものであった。普段、なかなかおうかがいすることができないお話をお聞かせいただき、とても貴重な機会をいただいたと思っている。

最後に、研究例会実施に向けて、さまざまなご準備をいただいた学会事務局・関係者の皆さまに、重ねて御礼申し上げます。